争後文学論争

下巻

一井吉見 監修

番町書房

戦後文学論争 下巻

定価 一六〇〇円 初版印刷 昭和四七年一〇月一五日 初版発行 昭和四七年一〇月三一日

監修 臼井吉見
編集 大久保典夫 紅野敏郎 高橋春雄 保昌正夫 三好行雄 吉田凞生

発行者 遠藤左介 発行所 番町書房 東京都中央区京橋三の五（主婦と生活社内） 電話五六七—〇三一一（代） 振替東京一五八四四

印刷 図書印刷株式会社
製本 板倉製本株式会社

©1972 Printed in Japan. 1090—730100—6959 乱丁・落丁本はおとりかえいたします

戦後文学論争　下巻

目次

『異邦人』論争

カミュの「異邦人」……広津和郎 三
広津和郎氏の「異邦人」論について……中村光夫 一七
再び「異邦人」について……広津和郎 二〇
カミュの「異邦人」について……中村光夫 三三
〔解題〕……吉田凞生 六一

『真空地帯』評価をめぐる論争

「真空地帯」について……佐々木基一 六九
「真空地帯」論……窪川鶴次郎 七六
組織と批評の問題から(2)……宮本顕治 八九
〔解題〕……紅野敏郎 一〇二

国民文学論争

近代主義と民族の問題……竹内好 一〇九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

新しき国民文学への道〈往復書簡〉……竹内　好　二五
民族の活路にかかわる問題……伊藤　整　二七
同一の批判基準の確立を……臼井吉見　二〇
国民文学……山本健吉　二三
国土・国語・国民……竹内　好　二九
国民文学の問題点……福田恆存　二七
国民文学について……野間　宏　二四
国民文学について……小田切秀雄　二六
国民文学の展望……菊池章一　二五
国民文学論の教訓……高橋春雄　一八四
〔解題〕……

現代かなづかい論争

みんなの日本語……桑原武夫　一九三
国語改良論に再考をうながす……福田恆存　二〇〇
かなづかい問題について……金田一京助　二三

国語改良論の「根本精神」をわらう……高橋義孝 三〇
〔解題〕……三好行雄 三〇

上部構造論争

マルクス主義文学理論批判……高橋義孝 三五
文学は上部構造か……本多秋五 三七
現実の反映こそが文学の本質である……除村吉太郎 三九
芸術の生命……佐々木基一 二六一
人間性は上部構造か……石田英一郎 二六八
左翼文学はなぜ不毛か……高橋義孝 二七一
マルクス主義文学理論の盲点……三浦つとむ 二八一
〔解題〕……三好行雄 二八八

『太陽の季節』論争

良風美俗と芸術家……佐藤春夫 二九三
文学か道学か……舟橋聖一 二九五

求道のすすめ……佐藤春夫 二九七
文学・倫理・享楽（対談）抄……舟橋・佐藤 三〇〇
賭博的作品の一典型……亀井勝一郎 三〇三
賭博性は文学の敵か……中村光夫 三〇五
批評家の誇大妄想癖について……亀井勝一郎 三〇九
独創と賭の意識……山本健吉 三一二
論争の詐術について……中村光夫 三一六
論争の発展のために……亀井勝一郎 三一九
〔解題〕……吉田凞生 三二三

昭和史論争

現代歴史家への疑問……亀井勝一郎 三三一
現代史研究の問題点……遠山茂樹 三四一
歴史の見方と人生……和歌森太郎 三五三
現代史の書き方をめぐって（座談会）……中屋健一他 三六四
〔解題〕……保昌正夫 三七七

『笛吹川』論争

創作合評……寺田　透他　三八五
「はしか」にかかることによってはじめて子供は大人になる……江藤　淳　三九三
「笛吹川」是非……本多秋五　四〇八
〔解題〕……大久保典夫　四一四

『蒼き狼』論争

「蒼き狼」は歴史小説か……大岡昇平　四二一
自作「蒼き狼」について……井上　靖　四三〇
成吉思汗の秘密……大岡昇平　四三七
歴史と小説……山本健吉　四五三
「蒼き狼」は叙事詩か……大岡昇平　四五六
再び歴史と小説について……山本健吉　四五八
国語問題のために……大岡昇平　四六一
歴史小説の真実性とは？……福田宏年　四六三
〔解題〕……高橋春雄　四六六

純文学論争

「群像」十五周年によせて……平野　謙　四五五
「純」文学は存在し得るか……伊藤　整　四七七
批評家のジレンマ……大岡　昇平　四八五
中間の締めくくり……平野　謙　四八八
純文学攻撃への抗議……高見　順　四九八
散文芸術の一面……中村　光夫　五〇七
ケンカでなく議論を……中村　光夫　五一一
文学はどこへ行く……山本　健吉　五一七
再説・純文学変質……平野　謙　五三三
文壇の私闘を排す……江藤　淳　五三三
文壇的な、あまりに文壇的な……福田　恆存　五四一
〔解題〕……大久保典夫　五五〇

「戦後文学」論争

「戦後文学」は幻影だった……佐々木基一　五五九

戦後文学は幻影か……本多秋五 五七二
戦後文学をどう受けとめたか……大江健三郎 五八八
戦後文学の精神像……磯田光一 五八五
「政治と文学」理論の破産……奥野健男 五九七
戦後文学私論……高橋和巳 六〇九
〔解題〕……大久保典夫 六三三
本巻収録論争関係資料……六三九

装幀　駒井哲郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

戦後文学論争

下巻

編集委員
大久保典夫
紅野敏郎
高橋春雄
保昌正夫
三好行雄
吉田凞生

凡　例

一、本書に収録の論文は、原則として初出に従い、旧字・旧かなづかいも原文通りとした。初出における明らかな誤植と思われるものは、これを訂正した。

一、新聞掲載時の小見出しは、これを削除した。

一、各論文末の出典記載は、月刊誌については月号、非月刊誌は号数をもって示してある。

一、解題における引用文中の漢字・かなづかいは、印刷の都合上、漢字を当用漢字に改め、かなづかいは原文通りとした。

『異邦人』論争

カミュの「異邦人」

廣津和郎

六月號の新潮でアルベエル・カミュの「異邦人」を讀んだ。サルトル、阿部知二、三島由紀夫諸氏の解説がついてゐる。それ等を讀むとこの小説は、大分高く買はれてゐるらしい。それから新聞に出た時評などを見ても、やはり評判が好いやうである。部分的には感心しないところもあると云つてゐる批評家もあるが、（福田恆存氏の如き）全體としてはどの批評家も賞讃してゐるやうである。

併しどうも私には讀後納得の行かないものが殘つた。譯文を通して見るので、原文は知らないが、併し譯文で讀んでも、無駄な飾りがなくて、好い文章のやうである。近頃は日本の小説にも隨分まはりくどい表現をするのがあり、外國文學の影響かと思つてゐたが、この「異邦人」の表現など端的で、寧ろ日本の小説よりも廻りくどくなくて讀み易い。

そして部分的に見るとよく描いてあるし、小説は上手な作者であると思うが、併し讀み終ると疑問が殘り、滓が殘り、後味が甚だよくない。その疑問について、後味の惡さについて、私は此處に考へて見たいと思ふ。

この小説は「一部」「二部」と二つの「部」に分れてムルソーといふ青年の手記の形式を取つてゐるが、その「一部」ではこの勤人として平凡な青年が殺人を犯すまでの事實を語り、「二部」では青年が殺人犯として捉はれて裁判に附せられるその裁判の顚末が書いてある。

そしてそれは丁度「一部」で殺人の事實を述べる事によつて一つの問題を提出し、「二部」ではそれをどう解釋するかといふところに作者のテーマがあるわけである。

この小説を讀んだ讀者の多くは、「一部」の殺人を犯すまでの事實を語つてゐるその敍述の中に、ところどころ妙に神經に引つかかるもののあるのを感じたらうと思ふ。

例へば母親が養老院で死ぬので、この若い平凡な勤人がそこに駈けつける。養老院の院長が棺を釘づけする前に、「母親の顏を見たくないか」と訊くと「見たくない」と答へる。此處なども讀者の神經に引つかかる。

人が「お母さんは幾つだつたか」と訊くと、「よく知らない、六十位」といふ。これも引つかかる。その他お通夜の時にミルク入りの珈琲を飲んだとか、煙草を喫んだとかいふ事が皆引つかかるやうに書いてある。そして葬式が濟むと直ぐ町に引つ返し、海水浴に行く。（アルゼリアだから暑い）その海岸でもと同じ事務所

に勤めて今は辭めたマリイ・カルドナといふ娘に遭ふ。

一緒に勤めてゐた當時から憎からず思つてゐたが、彼女の方でも多分さう思つてゐたらうと、主人公の青年は云つてゐる。そのマリイ・カルドナと一緒に泳ぎ、喜劇俳優のフェルナンデスの出る映畫を見に行き、そして彼女を自分の室につれて來る。母の葬式の直ぐ後で女とふざけ、女を部屋に引き入れたといふ事も、やはり讀者の神經に引つかかるやうに書いてある。

かうして讀者の神經に引つかかるところは、クロース・ワーヅ・パッヅルで、暗示の鍵が與へられるやうに、作者が態と物語のところどころに撒き散らして置いたやうに見える。妙なところで線が太くなつてゐたり、著物のヒダにしては妙な筋が入つてゐるなと思つて注意して見ると、そこに思ひも設けぬものの形が隱れてゐるあの「繪探し」といふ遊び、一頃兒童雜誌などでよく流行したあの「繪探し」の態とらしい線の表現にも似てゐる。

クロース・ワーヅ・パッヅルの鍵はそれに止まらない。そのマリイ・カルドナと度々會つてゐる中に、女が「わたしを愛してゐるか?」と訊く。すると、「そんな事は何の意味もないが、恐らく愛してはゐないだらう」と答へる。此處も引つかかる。「前から憎からず思つてゐた」とその前には述べてゐながら、女から訊かれると「恐らく愛してゐないだらう」と答へる。「憎からず」と「愛する」とは違ふらしい。

その癖女が「結婚してくれ」といふと、「そんな事は何の重要性もないのだが、君が望むなら一緒になつても構はない」と答へる。「何の意味もない」とか「何の重要性もない」とかがこの人物の口癖であるし、口癖であるだけに、又その考へ方でもあるのであらう。

こんな風に一々作者が「一部」の中に撒き散らしてゐる鍵を拾つてゐたらキリがないが、讀者が少し注意して讀んだら、到るところでそれを見つけるだらうと思ふ。こんな風な人物が殺人を犯すやうになる。それも實に好い加減な動機である。アパートで顏見知りの評判のよくない女衒をしてゐる男に、情婦を呼び出す手紙の代筆を賴まれる。

それはその女が他の男と浮氣をしたので、復讐してやるために呼び出すのである。例の「意味もない」「重要性もない」といふ考へ方からであらうが、何の反省もなくその代筆を引受けてやる。その代筆の手紙に呼び寄せられて、女は女衒の部屋にやつて來る。女衒は暴力で復讐をする。それは大變な亂闘であるが、青年はその仲に割つて入らないでそれを傍觀してゐる。此處も亦鍵である。

その復讐を受けた情婦の弟がアラビヤ人で、それが姉のカタキを討つてやらうとその女衒をつけ狙つたり、それが出會つて喧嘩になり、及物で切り合つたりする場面など精細に語られてゐる。青年は女衒と一緒に歩いてゐるので、その味方と見られるが、最初は別にその亂闘に加はらない。併し何かの拍子に女衒にピストルを渡される。それを持つて一人で海岸の方へ散歩に出かけると、そのアラビヤ人が砂の上に寢ころんでゐるのに會ふ。アラビヤ人の方では女衒の味方だと思つてゐるので、彼が近づくと敵對する

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com